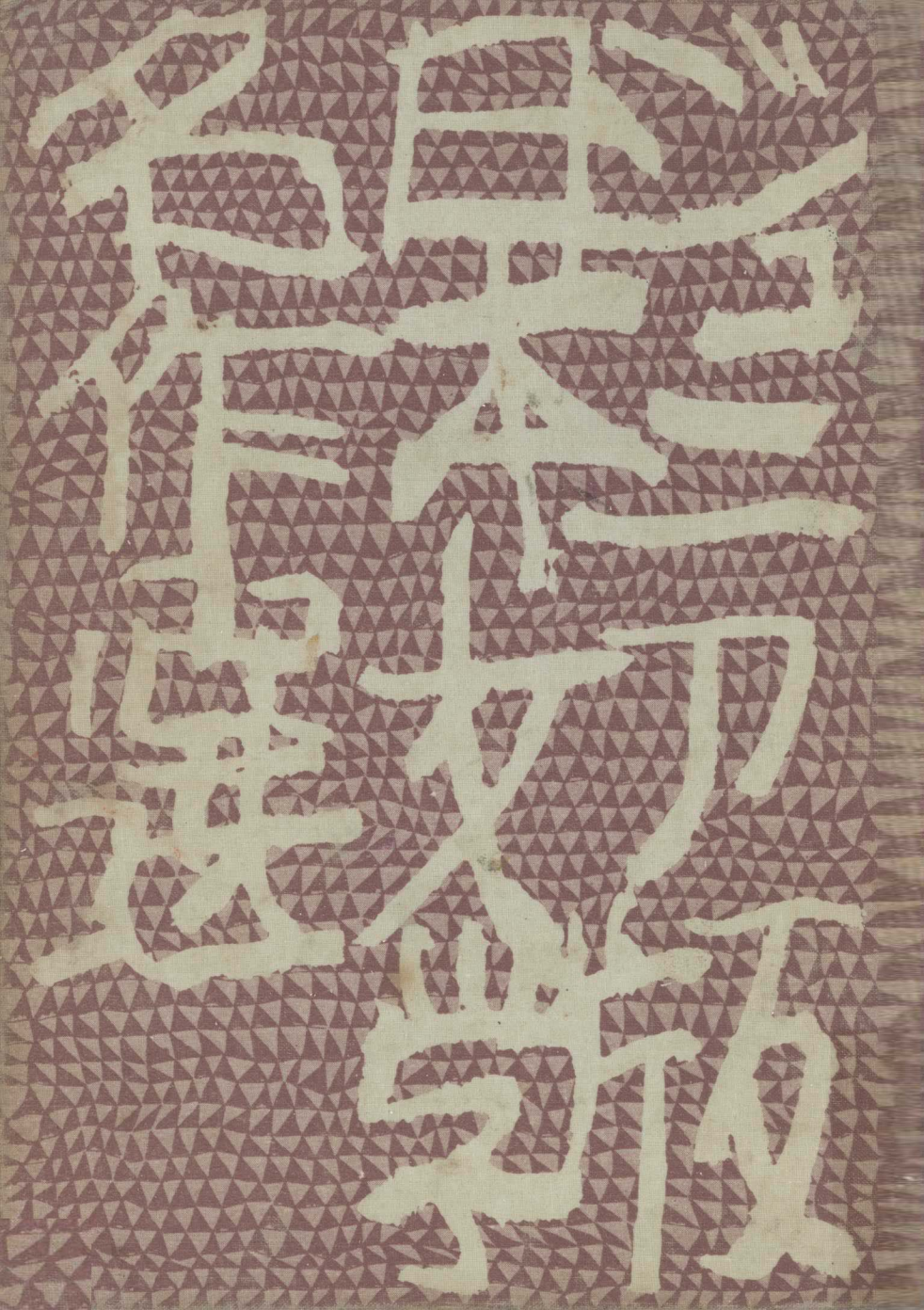


友情

版日本文学名作選——〈15〉

武者小路実篤

偕成社

《原作を全文収載》

友　情（ジュニア版日本文学名作選15）
昭和四十年三月二十五日　発行
定　価　二百九十円

著　者　武者小路実篤
発行者　今村　広
印刷者　中村　榊
印刷所　新興印刷製本株式会社
発行所　株式会社　偕成社
東京都新宿区市ガ谷砂土原
振替　東京一三五二番

●N・D・C　913

乱丁本はおとりかえいたします。

❄この本について

吉田精一

武者小路実篤氏が、現代日本のもつ最大の文学者のひとりであることは、あらためていうまでもありません。

氏は近代日本文学の上に、大きな影響をあたえた人です。明治の末から大正の初めにかけて、日本の文学の方向を大きく曲げるという大事業をやってのけた人です。そういう意味で、もし日本人の中からノーベル文学賞をもらう人があるとしたら、第一に資格のあるのは、氏だということは、ずっとまえからいわれていました。

氏の思想はきわめて健康で、明るく、倫理的なものです。人類の光明ある将来をめざして、個人と全体との調和を期待しています。文学者ではありますが、宗教家に近いといってもよく、美と善とは、氏の場合に一致しています。

こういう思想を表現する文体がまた無類です。くったくなく、無造作に思ったことをいいながら、それが自然なままに品格のある文章になっていて、そこに巧まないユーモアが流れています。こったことばや、奇抜な比喩などは少しもない、素朴な文体ですが、ふしぎに人の心によろこびや力をあたえます。

また、少年から老年の人にいたるまでの読者をかかえている意味でも、氏の作品は国民の文学といってよいでしょう。いやもっと広い、人類の文学といってよいかもしれません。

目次

武者小路実篤

●友情……6
●或る日の一休……140
●小さき世界……153
●桃源にて……201
●だるま……228

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

●宮本武蔵……238
●盲目と聾者……263
●仙崖和尚……275
◉解説……東京教育大学教授 吉田精一……302

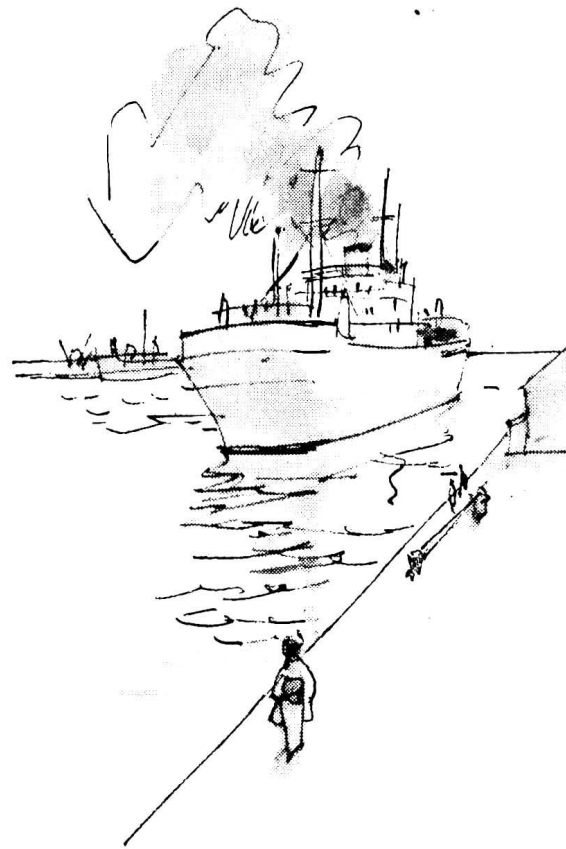
装幀—AD 沢田重隆・D 坂野豊

さし絵—永井潔

口絵写真—横田正知

友情

ジュニア版日本文学名作選——〈15〉武者小路 実篤



友情

上編

一

野島がはじめて杉子にあったのは、(1)帝劇の二階の正面の廊下だった。野島は(2)脚本家をもってひそかに任じてはいたが、芝居を見ることはまれだった。

この日も彼は友人にさそわれなければ行かなかった。さそわれても行かなかったかもしれない。

その日は村岡の芝居がやられるので、彼はそれを読んだときからへいこうしていたから。しかし友だちの仲田にすすめられると、ふと行く気になった。それは杉子もいっしょに行くと聞いたので。

彼は杉子にあったことはなかった。しかし写真で一度見たことがあった。それは友だち三、四人

とうつした十二、三のときの写真だったが、彼はその写真を何げなく何度も何度も見ないわけにゆかなかった。みなのうちで杉子はずぬけて美しいばかりではなく、清い感じがしていた。彼はその写真を机の前にかざっておいたら、きっといい脚本がかきたくなるだろうと思った。

しかし彼は仲田に写真をくれとはいえなかった。そしてその後仲田のところへ行って、もう一度その写真を見せてもらうことはできなかった。そして当人にもあうことはできなかった。一度、声を聞いたことがあるように思った。しかしそれは杉子ではなく、杉子の妹の声だったかもしれなかった。

彼が帝劇に行ったときはまだすこし早かった。彼は廊下に出ていまに仲田が妹をつれてくるかと思った。それを心まちしていたが、若い女をつれてくる男が仲田ではないとかえって安心もした。

彼はそのとき、村岡が友だち二、三人と何か声高に話しながらくるのに出あった。彼は村岡とはある会で一度あったことがあるが、目礼をしたりしなかったりするあいだがらだった。そしてこのごろは、あっても知らん顔をすることをつとめていた。それは彼が村岡のものをよく悪口いったからである。きょうやられる芝居も彼は公にではないが、かなり悪口いった。

もとよりそれは文学をやる仲間同士でいったので、法科に行っている仲田とはほとんど文学の話はしなかった。仲田は彼が村岡のものをきらっているなぞということは知らなかった。新しいもの

だから、それにひょうばんのいいものだから、彼はきっと見にゆくだろうときめていた。それで説明係りくらいに彼をつれて、芝居を見ようというのだった。

彼はそれに気がついていた。そしてそれをめいわくにも思った。しかしことわる気にはなれなかった。

彼は村岡と顔を見合わせた。両方がおじぎしたそうにも見えた。しかしどっちも自分のほうからさきにおじぎしようとはしなかった。おせじのように思われるのもいやだったのだろう。あるいはさきにおじぎして、あいてに見くびられるのがいやだったのだろう。

すくなくも村岡は彼より四つ五つ上で、世間にも、もうみとめられていた。彼は五つ六つみじかい脚本をかいたが、だれにもかえりみられなかったのは事実だ。しかし彼は自分のほうから頭をさげるには、あいてをかるく見ていた。

とうとうおじぎせずに村岡は通りすぎた。彼がふとふりかえったとき、村岡は友だちと彼のほうをふりかえって何かいっていた。

「あれが野島だよ。」

「あれか。くだらない脚本をかくやつは。」

そんなことをいっているように思った。そしてきゅうに不快を感じながら顔をそむけると、むこうから仲田が、妹の杉子とやってきた。写真よりはずっとおとならしくなったと思った。だが若しく美しかった。

「もう、きみはきていたのか。」

「ああ、すこしまえに。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「これが野島君だ。ぼくの妹だ。」

ふたりはだまって、ていねいにおじぎした。

二

野島は杉子とはほとんど話をしなかった。杉子が芝居を感心して見ているらしいのに不愉快を感じた。しかしそれは無理もないとも思った。仲田も感心しているようなことをいったが、それはむしろ彼にたいするおせじのように見えた。

「やはり新しいものは、われわれに近い感じがするね。」

そんなことを仲田がいったとき、彼はべつに反対する気にはなれなかった。

「めしを食おう。」

仲田がそういってさきにたって行った。三人はむかいあってめしを食った。仲田の妹は野島のいるのをべつに気にはしていないらしかった。しかしほとんどしゃべらなかった。そしてふたりの話をべつに注意して聞いてもいなかった。それよりはおなじとしごろの女の人がいると、その女のほうを注意しているようだった。

野島はそうはゆかなかった。彼は杉子のだれよりも美しいことを感じた。そして杉子のわきにいることをこだわらないではいられなかった。

いつも仲田にはぶえんりょになんでもいえた彼が、きょうは何一つこだわらずにはいえなかった。村岡のものの悪口も彼は思いきっていえなかった。しかし彼は心のうちによろこびを感じた。そしてのんきなことばかり、いつもより調子にのってしゃべった。

それがまた彼にはいやしいようにも思えたが、心のよろこびは、ややもするとことばとなって、あふれ出てきた。そして杉子がすこしでも笑うと彼は幸福を感じた。やがて幕のあくリンが聞こえても彼はいつまでもそこに腰かけていたかった。

しかし杉子はあわてて立った。

ふたりもあとをついて芝居を見にいった。彼はもう芝居は気にならなかった。ただ何げなく杉子の顔を見る機会をつくることに苦心した。ここに自然のつくったもっとも美しい花がある。しかも自分の手のとどくかもしれないところに。しかし彼は杉子とは一言も話す機会をつかめなかった。ただ兄と話すのを聞いて、快活な、思ったことはなんでもへいきでいうたちだと思った。そしてはっきりものをいう頭のわるくない女だと思った。

つぎの幕のあいだに彼は、とうとう聞いた。

「きみの妹さんはおいくつだ。」

「十六だ。まだほんとうの子どもだ。背ばかり大きいが。」

「そうか、ぼくはもう十七、八ぐらいかと思った。」

彼はほんとうはもう十九か、二十ではないかと思っていた。十六ならまだ安心だ。自分と七つちがいだ。自分がすこし有名になるじぶんに、ちょうど十九か、二十になっている。

彼はそんなことまで考えていた。彼は女の人を見ると、結婚のことをすぐ思わないではいられない人間だった。結婚したくない女、結婚できない女。これは彼にとっては問題にする気になれない女だった。

そういう女にいい女がいると、彼は一種の嫉妬さえもちかねなかった。女は彼にとっては妻としてよりほか、値のないものだった。結婚が彼にとってすべてであった。女はただ自分にだけたよってほしかった。

そういう彼が杉子を見て、すぐ自分の妻としての杉子を思うのは当然であった。彼はそういう女をもとめていた。そして杉子がそういう女ではないかとひそかに思っていた。ところが事実は理想的以上に見えた。自分にはすこしもったいなさすぎるようにさえ思えた。そして仲田が、その女を自分の妹あつかいし、ばかにしているのをもったいないことをするやつだくらいに感じた。

その晩、かえっても杉子のことを思わないわけにはゆかなかった。

三

二、三日たっても彼は杉子のことを忘れなかった。かえってますます理想化してきた。彼は自分の心の平静をうしないかけた。

つぎの日曜の朝に彼は仲田のところに出かけてみたが、杉子らしい声さえ聞こえなかった。彼は仲田と話しても杉子のことに気をとられて、つい仲田のいうことを聞きもらすことさえ多かった。そしてなんとなくおちつかなかった。仲田とはロシヤの過激派について話していた。

「食うにこまれば人間はなんでもする。日本だって、いまよりせめて倍も米が高くなればだまっていたってみな、過激派になる。圧迫しきっても、どこかにすきはあるものだ。ロシヤに過激派のお

こったのは当然だ。またそれに反対するものの出るのも当然だ。当然と当然がぶつかって、殺しあうのも当然だ。だがそれでますます米がたかくなるのも当然だ。この当然をどこかできりぬけて、みなにめしを食えるようにするのが問題だ。まあ、見ているよりしかたがない。」

仲田はそんなことをいっていた。

「当然だが、だんだん血なまぐさいほうに、加速度に進んでゆきそうだ。それも当然だ。しかしもうみな、平和にあこがれているだろう。いま偉大な人間が出てきて、それが民衆の希望と一つになればたいしたことができる。しかしそれは想像以上の事実で、ロシヤには人物もたくさんいるだろうから、いまに事実によってある解決をあたえてくれるだろう。その解決をあたえてくれるもので、世界の思想が、大きな影響をうけるだろう。自分はレニン[4]や、トロツキー以上の人物がいまに頭をもちあげると思う。どこか思いもかけないところで。」

野島はそんなことをいったが、心はほかにあって、いつものように興奮することはできなかった。何かものたりない。何かおちつかない。彼は立ったり、すわったりした。いろいろの本をもちだしてはひろいよみした。

「きみはどんな人間を尊敬する。」

仲田はふいにそんなことを聞いた。

「きみの妹さんのような方を。」と彼はふといたくなったが、まさか口にはだせなかった。

「ぼくは、やはり、正義の観念の強い、意志の強い、信じることをおこなう人間がすきだ。しかし

できるだけ他人の運命を尊敬するものがすきだ。なんといったって聖人や、神のような人は偉い。一時的の波瀾のためにうきしずみする人間は尊敬することはできない。それから残酷なつめたい人間はきらいだ。いつも損をしないことばかり考えているものもきらいだ。どこかに人間のおもしろみが出なければ。」

このとき、となりで杉子らしい笑い声が聞こえた。しかしそれはすぐきえて、むこうの室に行ったらしかった。

「きみの理想はどうだ。」

「ぼくはまよっている。いまの政治家の考え、いまの法律の基礎はずいぶん白ありにたかられている気がするよ。これからの政治家はどう手をつけていいかわからない。目的は世界じゅうの平和、人類の幸福にあることはわかっている。それをまたみださずに国民の幸福を樹立しなければならないこともわかっている。富の不平均も、ことに食えない人間の運命をいまのままにしておくことのよくないことも知っている。

しかしそれをどうしたらいちばんいいか、それはわかっているようでわかっていない。だいいち官吏になる気もしないし、実業家になる気もしない。学者になりたい気もするが、嵐の中にじっとおちついて室にこもっているのが、ほんとうかうそかもわからない。じっさい、いまの法科の学生は自覚をちゃんとつかんでいる人はすくないだろう。何かに動かされてはいるだろうが、それでみな議論は多いがね。」

仲田は野島がうわのそらで聞いているのがわか

ったか、話をぷつっとやめた。

「なんでもいいさ。ぶつかればわかるだろう。みなその人のもっている価値だけきり発揮できないのだからね。」

四

野島はひるまでいて、仲田の家を辞した。杉子にはとうとうあえなかった。彼はなんだかものたりない気がして四つ角を右にまがった。すると十五、六間(5)さきから、杉子が生け花をならいに行ったかえりとみえて葉蘭を油紙につつんでもってかえってくるのに出あった。

彼はふいなのでびっくりして、立ちどまった。そして気がついて歩き出したじぶんに、杉子は近づいてきてすこしほほえみかげんにあいさつした。彼もあわててていねいにおじぎした。彼は何か話しかけたかった。しかし、ことばは出なかった。杉子は通りすぎた。彼はむちゅうで、二、三十歩歩いてふりかえったとき、もう杉子のすがたは見えなかった。しかしこのわずかなことが、きゆうに彼を別人のように快活にさせた。

(6)物質論者にいわすと、ここに何か知らない物質が、恋する者から厚意を見せられると、血管のなかに生ずるらしい。人はそのときおのずと快活にならなければならない。野島は二十三にはなっていたが、女をまだ知らなかった。

野島はこの気持ちをうちにかえってももっていた。そしてだれかに杉子のことを賛美して話したい気になった。彼はもう杉子のいる人生をののしる気にはなれない。彼は自然がどうしておしげも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com